

# 民主青年新聞

●ホームページ www.dylj.or.jp ●Eメール minsin@dylj.or.jp

見どころ

全ての人に「結婚の自由」を 同性婚訴訟 (3面)  
教えて先輩! 高校生活のこと (6、7面)  
政権交代で「5つの提案」を実現し、青年が希望をもてる新しい日本へ(下) (10、11面)

## 歴史・文化学び向き合う —アイヌ民族のこと

▶ウポポイでの展示(2020年11月23日)



### 「先住民族の権利に関する国際連合宣言 (UNDRIP)」より一部抜粋

第1条 [集団および個人としての人権の享有]  
先住民族は、集団または個人として、国際連合憲章、世界人権宣言および国際人権法に認められたすべての人権と基本的自由の十分な享受に対する権利を有する。

第2条 [平等の原則、差別からの自由]  
先住民族および個人は、自由であり、かつ他のすべての民族および個人と平等であり、さらに、自らの権利の行使において、いかなる種類の差別からも、特にその先住民族としての出自あるいはアイデンティティ(帰属意識)に基づく差別からも自由である権利を有する。

第3条 [自己決定権]  
先住民族は、自己決定の権利を有する。この権利に基づき、先住民族は、自らの政治的地位を自由に決定し、ならびにその経済的、社会的および文化的発展を自由に追求する。

第8条 [同化を強制されない権利]  
1. 先住民族およびその個人は、強制的な同化または文化の破壊にさらされない権利を有する。

第26条 [土地や領域、資源に対する権利]  
1. 先住民族は、自らが伝統的に所有し、占有し、またはその他の方法で使用し、もしくは取得してきた土地や領域、資源に対する権利を有する。

荒木さんは「差別は良くない」と言われたから『良くない』と思考をやめること、『アイヌ民族』かわいそうな存在』と同情して学びをやめることは違う』と言います。「学んだ知識を基に自分はどう考え、振る舞うのが大事。それが共生していくことを考えることにつながる」

民青北海道委員会の札幌中央地域班では、今年6月にアイヌ民族出身で権利を守る運動をしている方を招いて話を聞く企画を計画しています。その企画の事前学習として3月からアイヌ民族についての学習会を隔週で行っています。

学習会は東京出身の宇野優希さん(25)が、ウポポイにアイヌ民族へのリスペクトが大事にしている文化と

「道内」にアイヌの人たちが運営する博物館があるのにわざわざ建てたのは、国がアイヌ民族を管理する意味合いが強いのでは」

宇野さんは、班会でのような感想と共に「同化政策は悪いことばかりだったのか。生活が便利になるとか多くの人がとって進歩があれば、多少の犠牲が伴ったとしても許されるんじゃないか」と率直な意見を話しました。それに対して他の班員から「アイヌの人たち政策が許されるという思いはなくなってきた。それは

班で3回の学習を積み重ねる中で、宇野さんは「アイン民族を知る中で、同化に関する国際連合宣言(UNDRIP)」が採択されたにもかかわらず、アイヌ民族には漁業権などの権利が認められていないことを知ったのが自分の中で大きかった」と宇野さん。「相手のことを知らない、差別的な風潮に乗せられてしま

上から目線だったと思う」と話します。「2007年に国連で『先住民族の権利に関する国際連合宣言(UNDRIP)』が採択されたにもかかわらず、アイヌ民族には漁業権などの権利が認められていないことを知ったのが自分の中で大きかった」と宇野さん。「相手のことを知らない、差別的な風潮に乗せられてしま

### 疑問をきっかけに

2020年7月、アイヌ文化を復興・発展させる拠点として北海道の白老町に国立施設「民族共生象徴空間」(ウポポイ)が開業しました。ウポポイに足を運んだ同盟員の関心をきっかけに、アイヌ民族の学習会を開く班会のように、同盟員の思いを取材しました。(文中仮名、今井千尋記者)

「道内」にアイヌの人たちが運営する博物館があるのにわざわざ建てたのは、国がアイヌ民族を管理する意味合いが強いのでは」

宇野さんは、班会でのような感想と共に「同化政策は悪いことばかりだったのか。生活が便利になるとか多くの人がとって進歩があれば、多少の犠牲が伴ったとしても許されるんじゃないか」と率直な意見を話しました。それに対して他の班員から「アイヌの人たち政策が許されるという思いはなくなってきた。それは

班で3回の学習を積み重ねる中で、宇野さんは「アイン民族を知る中で、同化に関する国際連合宣言(UNDRIP)が採択されたにもかかわらず、アイヌ民族には漁業権などの権利が認められていないことを知ったのが自分の中で大きかった」と宇野さん。「相手のことを知らない、差別的な風潮に乗せられてしま

### 学んで考えること

#### 知る機会 あったけど...

班会を援助する道役員の荒木智也さん(28)は、学校でアイヌ民族について学ぶ機会があったと言います。「道東の出身で、修学旅行で阿寒湖温泉街にあるアイヌ文様の刺しゅうや染

器を体験する場所に行ったり、総合的な学習の時間で学んだりした」「北海道以外で暮らす人よりは知る機会があったと思う。でも、変わった文化を持った人たち、かなりの認識しかなかった」と振り返ります。

荒木さんも昨年ウポポイを訪れ、「共生って何だろうと感じた」と話します。